

KYOTO
UNIVERSITY
OF
EDUCATION

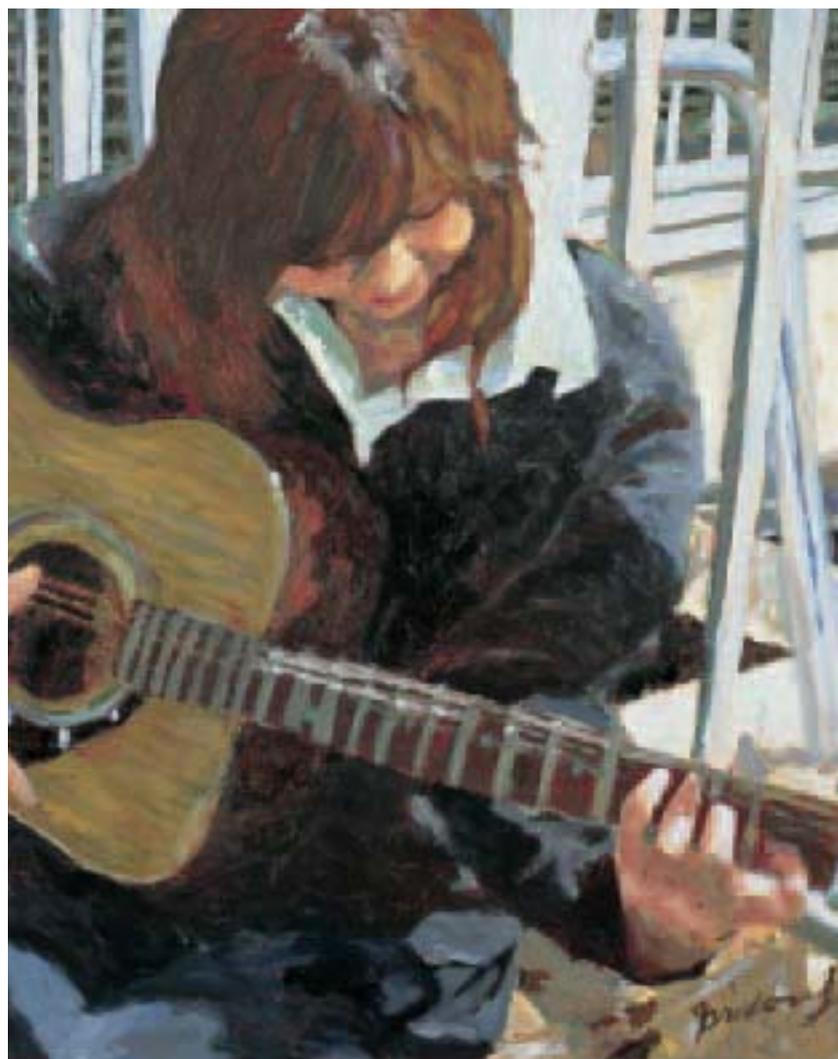
No.
115
2005年3月25日 発行

KYOKYO

特 集

サテライト教室開設記念特集

「e-Project@kyokyo(旧京教大学生科研費)」について



京都教育大学

表紙「ギターが弾きたくて」

附属高等学校 2年

坂上 碧

私がこの絵を描くにあたって特に意識した事は物1つ1つの光の受けとめ方です。光に背を向けた背中からはにじみ出るようなまぶしさを、服の陰影、そして柱1つをとっても赤みを帯びた白、あるいは青がかった白がある事を実際描いてみて深く実感しました。モデルは私の友達なのですが実際にギターを弾く事ができません。不慣れそうな指や体のぎこちなさ、少しかがんで手元を伺う様な姿勢はうまく表現できたので自分でも満足のいった一枚に仕上がりました。



(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは、大学基準協会の定める大学基準に適合した大学が使用できるマークです。

CONTENTS

■ 表紙 ■ 附属高等学校2年 坂上 碧

平成16年度卒業式告辞

学長 村田 隆紀 2

特集

サテライト教室開設記念特集 4
「e-Project@kyokyo (旧京教学生科研費)」について 10

留学生の声

THE TEACHER'S MISSION 教員研修留学生 Ernesto Urbano Romero Rojas 16

研究余滴

常識の非常識 附属環境教育実践センター教授 荒木 光 18

京教今昔物語

30年を振り返って 音楽科教授 西 勇夫 20

海外見聞録

韓国の春川(チュンチョン)教育大学校との交流 学長 村田 隆紀 22
上海師範大学創立50周年記念に招かれて 学長 村田 隆紀 23

附属学校園だより

みんなでつくるフレンドキッズタイム 附属桃山小学校副校長 川端 建治 25
平成16年度教育実践研究協議会が終わりました 附属京都小学校副校長 多田 光利 26
「国際理解学習」と「国際交流活動」 附属桃山中学校副校長 多羅間 拓也 27
ボールルームダンスの授業 附属京都中学校副校長 橋本 雅子 28
カガミとしての保育・教育 附属幼稚園副園長 川端 智江 29
生徒が創る文化祭 附属高等学校副校長 斉藤 正治 30
高等部バザーへ向けて 附属養護学校副校長 小竹 健一 31

非常勤講師から

数学教育研究からみた脳科学の形象 数学科非常勤講師 黒田 恭史 32
みちのくひとり旅 産業技術科学科非常勤講師 宮崎 眞 32

退職・転任教職員挨拶

大学を去るにあたって 学長 村田 隆紀 33
退職にあたって 理事・副学長 小寺 正一 34
退職にあたっての感謝のことはば 理学科教授 前川 紘一郎 34
ありがとうございました 理学科教授 伊吹 紀男 35
光陰矢の如し 音楽科教授 西 勇夫 35
23年間ありがとうございました 音楽科教授 小林 幸男 36
命の甘美な学園に感謝 美術科教授 脇坂 淳 36
緑あふれる大学での思い出 家政科助手 藤井まり子 37
ありがとうございました 英文学科教授 鈴木 壽一 37
定年退職にあたり 教務課教務課長補佐 上田 正人 38
教員養成へ夢を託して 附属高等学校数学科教諭 小宅 邦夫 38

卒業生の声

美術をより身近なものに… 教科教育専攻美術科教育専修卒業生 松村 一樹 39
やっぱり先生、やめられへん！ 平成15年度現職教員長期派遣研修生 木内 知江子 39

原稿募集・編集後記

地域連携・広報委員長 小寺 正一 40

平成16年度卒業式告辞

学長

村田 隆紀

平成16年度教育学部の卒業式と大学院教育学研究科修士課程および特殊教育特別専攻科の修了式を挙行するにあたり、卒業生、修了生の皆さんへの饒のことばを送ります。

まず、皆さんの卒業と修了に対して、心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。特に、ここには本学と交流協定を結んでいる上海師範大学、タイ国ラジャパットインスティテュートをはじめ、多くの国から様々な形で本学で勉学をした留学生が多数おられますが、留学生の皆さんに対しても、この大学での勉学を無事に終えられたこととお祝いし、今後皆さんの故国と日本、特に京都教育大学との大切な架け橋となっていただくようお願いいたします。学部を卒業する多くの皆さんは、4年前の4月にこの講堂で入学式に参加したことを、懐かしみ、この4年間の楽しい大学生活を、感慨を持って思い出していることでしょう。また、大学院修士課程や特殊教育特別専攻科を修了する皆さんに対しても、本学における研究生活を意義深く送り、達成感に満たされていることでしょう。それとともに、この大学を去る一抹の寂しさも感じておられることと思いますが、それはこの京都教育大学が、皆さんにとって忘れがたい学びの場であったことに他ならないことを示しているのだと思います。

さて、このところ教員養成についての大きな動きが出てきたことは、皆さんもご存知のことと思います。文部科学省は「教員の資質向上」を最重要課題として位置づけ、「教員養成の専門職大学院」の構想を打ち出して、これまでの伝統的な教員養成のあり方を大きく変更しようとしています。実は約15年前から、教育大学は教員養成機能の縮小を迫られてきました。本学についていえば、昭和63年の総合科学課程の設置、平成9年の改組による教員養成課程の縮小、平成12年の教員養成課程の120名と

いう大幅定員減などを経てきました。その上、県域を越えた教育学部の再編統合までが政策として打ち出され、1県1教育学部までもが否定されそうになったことも、記憶に新しいところです。

ところが昨年から、教員需要の急増が特に近畿地方で顕著になり始めました。現在の学校で働いている教員の年齢構成を考えると、この傾向は今後かなり長期間続くと考えられ、教員養成大学はそれに対してさまざまな対応策をとらなければならなくなりました。このことの具体的な現れとして、本学の教員就職率は昨年63.8%となり、全国の教員養成大学・学部の中で第5位になりました。

本学にとっては、このことはどのような教員養成を行っていくべきか、社会の複雑化、多様化に伴って、新しい問題が次々に生じている学校現場で、実践的な指導力を持った教員を育てるために、どのような方針で臨むべきか、などのことについて、これまで以上に真剣に考えるべき時にきています。私たちにとっては、ようやくこの大学の本来の役目である「教員養成」が国の文教行政の中で最重要課題として取り上げられたことを重く受け止めて、これからの大学の進むべき道を開いていかなければなりません。

多くの皆さんはこれから教育の仕事に就かれることでしょう。そうでない方たちも、本学での勉学の中で、教育について学び、考え、子供たちと触れ合うさまざまな体験をしてきたことでしょう。また、すでに教職にあって、さらなる研修を積まれた方もおられます。教育は、皆さんの次の世代の子どもたちと直接にふれあいながら、将来を見据え、そのために働く仕事です。この仕事をしていくためには、建前ではなく、自らの生き方を子どもや生徒の前に晒しながら生きていく覚悟が必要です。その中では

様々な失敗もあるかもしれません。しかし、失敗は誰にもあるもので、それを通して学び、それを繰り返さないことで、教師は成長していきます。若い教師は、子どもや生徒にとっては、安心してついていける身近な先輩なのです。そのことに自信を持ち、子どもの未来のため、力を注いでいただきたいと思います。

世界に目を向けると、戦争、災害、テロ、貧困といった暗いニュースがいつまでも続いています。皆さんの入学されたとき、私は皆さんに「皆さんは21世紀になって初めての本学への入学生であり、この世紀に生まれてくる子どもたちの教育に携わる、大変重い責任を担っています。」と訴えました。このような混沌とした世界は、21世紀になってか

ら顕著になっているように思えます。将来を担う皆さん方への期待は、私の中では今も変わることなく続いています。教育の世界で、皆さんは子どもたちにもこのことを訴え、新しい世界の創造に向けて、日々努力してください。子どもたちは一見すると何もわからないように見えるかも知れませんが、社会のあり方を敏感に感じ取り、批判的な目を育てています。皆さんが、子どもたちと同じ目線を置いて、一緒に考えようと努力すれば、子どもたちはきっと皆さんについて来てくれることでしょう。

皆さん方の今後のご活躍を期待しています。この京都教育大学に学んだことが、皆さんのこれからの人生に意味と価値をもつことを心から願っています。



特集

サテライト教室 開設記念特集



教員養成を主な目的とする本学では、これまで附属学校園を中心として一般校も含めた学校教育に関わる実践的研究を行って来ていますが、さらにその場を学外に求める拠点として、サテライト教室を京都駅前にあるキャンパスプラザ京都に開設しました。交通の利便性を利用して、サテライト教室では大学院修士課程学校教育専修に、主として教育現場に働きながら学ぶ現職教員を対象とした実践教育学コースを新たに設け、その授業を17年4月より夜間に開講することにしています。さらに、週末や長期休暇を利用した主として教員のための公開講座やウイークデイの昼間には本学名誉教授による一般向け公開講座なども既に開いています。今後、地域に開かれた大学をめざした取組を充実させるべく、様々な事業や催しを企画する予定です。

このサテライト教室開設を主として教育関係者を中心とした多くの方々に知って頂くとともに、本学の教育研究の方向を教育関係者の方々と議論を通して確かなものとして行くために、一連の講演会・シンポジウムを企画しました。本特集はその内の第1回～第4回の内容をご紹介します。また、

既に実施した本学名誉教授による公開講座もご紹介します。

第1回サテライト教室 開設記念講演・シンポジウム

「明日の日本の教育を京都から

—京都教育大学が地域と共にめざすもの—

・講演会「これからの教育大学への期待」

杉野 剛（文部科学省専門教育課長）

・シンポジウム

「明日の京都の教育と京都教育大学に

求められるもの」

武田 暹（京都府教育委員会教育長）

門川 大作（京都市教育委員会教育長）

村田 隆紀（京都教育大学学長）

司会 小寺 正一（京都教育大学副学長）

開設を記念する第1回の講演会・シンポジウムは、10月2日（土）午後1時30分からキャンパスプラザ京都5階の第1講義室を会場に開催されました。

この講演会・シンポジウムは、この後開催を予定している5回のシンポジウムの総論にあたるもので、本学が京都における学校教育、地域教育、生涯教育にどのような寄与・貢献ができるのかを教育関係者、市民の方々と共に考えようという趣旨で開催されたものです。

当日は、京都府教育委員会、京都市教育委員会の関係者、京都府内、京都市内の学校教職員、他大学の関係者それに本学同窓会員と本学教職員が加わり240名を超える参会者を得、盛会となりました。

会は高乗秀明サテライト教室運営委員会委員の進行で始まりました。最初に本学の村田隆紀学長から、「ここ1年教育を巡る動き、状況は大変目まぐるしいものになってきているが、これらに本学として積極的に対応してゆきたい。今日のこの会で皆さまからさまざまなご意見ご提案ご指導をいただきたい。」との開会の挨拶がありました。

第1部の講演会では本学の菊川治理事からの講師紹介ののち、文部科学省高等教育局専門教育課長杉野剛氏による「これからの教育大学への期待」と題する基調講演が行われました。講演要旨は以下の通りです。

1. 河村プランについて

河村プラン（2004.8.10）の骨子は以下の4点である。

- (1) 義務教育制度の弾力化
- (2) 教育委員会制度の改革
- (3) 義務教育経費の国庫負担
- (4) 教員養成の大幅な改革（専門職大学院での養成）

前の3点は制度改革であるが、教育改革の成否を決するのは制度改革ではなく、教員の資質・能力をどのようにして向上させるかにあり、遠山大臣の時代からこの課題意識、専門職大学院構想は大きな流れとしてあった。教員養成のあり方に関する課題は、文科省の基本的な認識である。

2. 国立大学における教員養成の問題点

教員の資質・能力に関する課題意識は、現在の国立大学における教員養成に対する不満から来るものである。その問題点は以下の4点に集約される。

- (1) 大学教員が教育現場のことを知らない。
- (2) 大学教員が教員養成に関心・意欲がない。
- (3) 大学教員の考え方や指導法がバラバラでまとまりがない。
- (4) 教員養成に関しての目的が明確でない。

3. 問題点の背景

国立大学における教員養成の問題点は、個々の教員の努力のレベルから来るものだけではなく、制度や構造上の問題から生じている面もある。その要因は以下の3点である。

- (1) 教員養成の目的が明確であった戦前の師範学校から、戦後の一般大学を含めた開放制による教員養成となったこと。
- (2) 文部省の指導の下で教員を目指さない「新課程」が設置され、学部の目的が曖昧になったこと。
- (3) 教員養成学部の教員の大半が他学部の出身者によって構成されており、教員養成学部で人材を養成するシステムが形成されていないこと。こ

のことは、教員養成学部における専門性が明らかになっていないことにつながっている。

4. 大学と教育委員会の関係

教育委員会の教員養成に対する対応にも問題はあ

- (1) 大学での養成に期待をせず、若くて子供の好きな人材であればあとは教育現場で育てるという発想。
- (2) 教育委員会が大学とは別に、独自に教員養成を行おうとする試み。

これらはいずれも不適切である。教育委員会は、教員養成にかかわって大学への支援や協力、注文を積極的にいき、優秀な人材養成のための大学教育に貢献するという姿勢がこれからは必要である。

5. 専門職大学院について

専門職大学院は法改正を経て昨年度から実現した。この大学院は研究者ではなく、プロフェッショナルな高度職業人の育成を行うものである。そのために例えば、「修士論文を課さない」「教員の3割を実務経験者から採用し、学部指導と区別する」などの条件が設定されている。教員養成専門職大学院設置の今後のスケジュールとしては、最速で本年10月に中教審に諮問、来年秋には答申が出され、法整備をして平成19年4月には第1号の誕生がありうる。開放制との関係ですべてが専門職大学院での養成とはならず、当面は現行の学部や大学院と並立の形になると思われるが、現在の学部における養成についても改革を積極的に進める必要がある。

6. 教員養成の今後のあり方

教員養成大学に限ったことではないが以下の3点が今後の方向性として重要である。

- (1) 法人化は規制緩和であり、その利点を生かすような取組が必要である。議論はほどほどにして、学長以下の役員による意思決定と実行が求められる。
- (2) 大学は現場（社会）との意志疎通を図り、学校、教育委員会、地域社会を活性化させる働きが求められる。
- (3) 教員養成は大学が責任を持っていき、教育委員会と互いに注文や意見を交換しあいながら、互いの責任と分担を意識し、連携の充実を図る必要がある。

最後に2点。

- (1) 大学の目的意識・ミッションを明確にし、構成員間で常にその確認をして欲しい。
- (2) 地域社会を意識しながらも大学であるからには目線を世界に向けたい。世界の動きを見、世界の研究者と交流しながら教育のあり方を考えて欲しい。

講演の後、参会者との質疑応答があり「都市部における教員需要の増大にどのように対処していくか」「教育実習指導の質の向上をどのように図るか」等の質問がだされました。

第2部は「明日の京都の教育と京都教育大学に求められるもの」をテーマにシンポジウムを開催しました。シンポジストに京都府教育委員会から武田暉教育長、京都市教育委員会からは門川大作教育長を迎え、本学からは村田学長が、そして司会を本学の小寺正一副学長が務めました。

前半は、村田学長から本学を取り巻く状況とそれへの本学の取組の現状について、武田教育長からは京都府の、門川教育長からは京都市の教育の重点と方向性について説明がなされました。

後半は両教育長から本学への要望と今後の連携について考えを述べていただきました。

武田教育長の発言要旨は次の通りです。

- (1) 教員養成においては「実践的指導力」を育成するための工夫に力を入れて欲しい。本年度からの「教員養成サポートセミナー」についても、今後は校種、人数を拡大していきたい。
- (2) 教員の交流については積極的に進めたい。可能であれば来年度からでも始めたい。
- (3) 教員研修については多くの分野で協力を得たいが、とりわけ重要なのは不登校や特別支援教育、情報教育の分野である。情報教育については機器の整備は進んでいるが、それが学力の向上にどう結びつけられるのかといった点での研究、研修を期待している。
- (4) 京都府は南北に長い地形であるので、北部の高校生が受講できるように、インターネットを活用した講座配信による遠隔教育などでの連携も期待している。
- (5) 不登校児等を対象とした宿泊学習やキャンプなどで学生・教員の協力を得ている。今後も引き続きお願いしたい。

- (6) 地域の教育力を向上させることが大きなテーマであるが、地域の人々をまとめ、教育力を向上させていくコーディネーターの役割を果たす人材の育成を望んでいる。

門川教育長の発言要旨は以下の通りです。

- (1) 生活のすべてが人の師となるにふさわしい人間、力溢れる教師を大学教育の中で育てて欲しい。学校教育の中で、全人格的な生徒指導が大切。教師自身が、自ら考え、判断し行動できる人間の育成をめざして、大学教育を充実させて欲しい。
- (2) 京都市の学校では敷地内全面禁煙を実施した。何ごとも子どもの目線に立った判断、決定が重要である。コンセンサスづくりは重要であるがそれが目的ではない。大学でも新しい取組を積極的に進めて欲しい。
- (3) 学生の教育現場での実習は重要である。以前は附属学校に加えて公立学校での実習も必修の時期があった。実地教育の面で大学と連携を深めていきたい。
- (4) 情報教育の充実、特に情報を扱うマナーやルールの指導が重要であると同時に人間と人間の直接のふれあいの大切さを痛感している。
- (5) 幅広い人間性と共に一つの事に熱中する、得意分野で専門性の発揮できる学生の育成もお願いしたい。

両教育長の発言からは本学への期待の大きさが伝わってきました。

最後に本学の手島副学長から参会の御礼と6階に開設しましたサテライト教室での公開講座や大学院特別講座の案内並びに第2回以降のシンポジウムへの参加のお願いが閉会の挨拶として述べられ、充実した記念講演会・シンポジウムの幕を閉じました。

第2回シンポジウム

「地域と連携した教員養成のあり方」

・基調講演

「本学における地域と連携した教員養成の取組み」

実地教育運営委員会 高乗 秀明

「公立学校での活動を通じた学び」

放課後学習チューター 丸橋 萌々

(音楽教育専攻4回生)

学校インターンシップ 中波 慎

(社会科教育専攻4回生)

・シンポジウム

「教員養成と地域連携のこれからのあり方

—学生の公立学校での活動を軸にして—

外田 敏久 (京都府教育庁指導部学校教育課
指導主事)

多紀 俊秀 (京都市教育委員会指導部
首席指導主事)

松谷 龍雄 (京都市立山王小学校校長)

松本 正信 (八幡市立中央小学校校長)

高乗 秀明 (実地教育運営委員会)

丸橋 萌々 (活動参加学生)

中波 慎 (活動参加学生)

司会進行 梶原 裕二 (京都教育大学実地教育運営委員会
副委員長)



第2回シンポジウムは11月13日(土)に、40名を超える学校関係者、学生の参会者を得て開催されました。

このシンポジウムは教員養成における実践的指導力の育成を学校教育との連携によって進める新しい取組について協議を深めることを目的とし、実地教育運営委員会が担当しました。

基調報告では高乗実地教育運営委員会委員が本学における地域と連携した教員養成の新しい取組みの全体像について報告し、その後、新しい取組に参加している丸橋萌々さん(音楽科教育専攻4回生)と中波慎さん(社会科教育専攻4回生)から活動の様子やそこから学んだ事などを具体的な事例を紹介しながらの報告がありました。

その後、梶原裕二実地教育運営委員会副委員長の司会で、京都府教育委員会外田敏久指導主事と八幡市立中央小学校松本正信校長からは「放課後学習チューター」を、京都市教育委員会多紀俊秀首席指導主事と京都市立山王小学校松谷龍雄校長からは「学校インターンシップ」を事例に、教育実習とは異なったスタイルの実地教育についてその特色や今後の可能性について、個別的・多面的な子ども理解の深まりモデルを通じた教職への意識の高まりなど、その特色や今後の可能性について議論を深めました。

第3回シンポジウム

「現職教育を考える」

・基調講演「教員養成大学の大学院の役割と現職教育」

木岡 一明 (国立教育政策研究所高等教育研究部
総括研究官)

・パネルディスカッション

「10年目研修を中心に」

塩田 卓三 (京都府総合教育センター企画教育部
主任研究主事兼指導主事)

「カリキュラム開発支援センターのことを中心に」

松下 佳弘 (京都市総合教育センターカリキュラム
開発支援センター/研究課指導主事,
京都教育大学客員教授)

木岡 一明 (国立教育政策研究所高等教育研究部
総括研究官)

手島 光司 (京都教育大学教務・学生指導担当副学長)

司会 浅井 和行 (京都教育大学教育実践総合センター
助教授)



第3回シンポジウムはサテライト教室開設記念行事であるとともに、附属教育実践総合センターの連続シンポジウム「教育を考える」シリーズの中の一つとして12月11日(土)に開催されました。はじめに、木岡一明国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官の講演「教員養成大学の大学院の役割と現職教育」があり、教員養成大学の抱える根本的な問題についての考察がなされ、その後パネルディ

スカッションに移りました。

パネルディスカッションでは、塩田卓三京都府総合教育センター企画教育部主任研究主事兼指導主事から10年目研修について、松下佳弘京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センター指導主事・本学客員教授からカリキュラム開発支援センターについてご提案いただきました。そして、手島光司本学教務・学生指導担当副学長から、本学大学院における現職教育の経緯、本学大学院の状況、現職教員の意識調査、課題等について説明がなされました。その後、大学と地域の教育委員会との現職教育における連携のあり方について具体的な議論がなされました。

第4回シンポジウム

「スクールリーダーの育成と教育大学の役割」

・シンポジウム

基調提案「京都教育大学の構想」

堀内 孜（京都教育大学教授（公教育経営学））

現職教員のニーズと経営力量形成

高見 茂（京都大学大学院教育学研究科教授（教育行政学））

京都府教育委員会としての考え方

小橋 秀生（京都府教育庁管理部長教職員課主幹）

京都市教育委員会としての考え方

市田 佳之（京都市教育委員会総務部教職員課長）

司会 高乗 秀明（京都教育大学教育実践総合センター助教授（実践教育学））



第4回シンポジウムは、1月8日（土）に京都教育大学サテライト教室にて開かれました。教室定員を大幅に上回る60人の参加者をえて熱のこもった提案と議論がなされ、本テーマの今日的な重要性、課題性が示されたものといえます。

本シンポジウムは、現在の教育改革において焦眉の課題とされている「学校の自律性確立」に向けた

組織経営能力をもつスクールリーダー、学校管理職の育成をどのように図るのか、この課題に対する教育大学の役割は何かを問うもので、本学で学校経営学を担当する堀内孜教授が本学が平成17年度から開講を予定している「学校経営改善講座」について授業内容も含めた具体的な提案をし、それに対する他の3人のシンポジストが各々の立場から意見を述べる形で進められました。京都大学の高見教授は、京都大学での取組みとその受容者調査の結果を報告し、学校管理職の任用に責任をもつ立場から京都府教育委員会教職員課主幹の小橋秀生氏と京都市教育委員会教職員課長の市田佳之氏が本講座への期待と具体化への検討課題を提起されました。

学校管理職者、教育委員会の研修担当者、また本講座の対象とする中堅教員など様々な参加者が、本テーマを自分との関わりにおいて具体的に論議し、本講座の意義を深めるものとなりました。

第5回および第6回に予定されている講演・シンポジウムは以下の通りです。

第5回 平成17年2月5日（土）

「小中連携による義務教育の充実をめざして」

・報告とシンポジウム

「京都府における小中連携の取組み」

西田 隆夫（京都府教育庁指導部学校教育課首席総括指導主事）

「京都市における小中連携の取組み」

中森 美幸（京都市教育委員会指導部首席指導主事）

「京都教育大学附属京都小・中学校における取組み」

小原 武（京都教育大学附属京都小学校研究部長）

司会 徳岡 慶一（京都教育大学教育学科助教授）

第6回 平成17年3月5日（土）

「地域に貢献する京都教育大学のこれから」

・基調講演 永山恵一郎氏（伏見プランニングセンター）

・本学の取り組み例の紹介

「大学と地域の連携による地域教育力の活性化」

西城戸 誠（社会科学科）

「地域と共に10年目を迎える

『ふれあい伏見フェスタ』

芝原 寛泰（理学科）

『うたとお話の会』の紹介

平井 恭子（幼児教育学科）

「京都府の施設と連携した学生教育の現状と課題

—学社連携のMVP」

杉本 厚夫（体育学科）

司会 武田 一郎（社会科学科）

京都教育大学名誉教授によるサテライト開設記念公開講座

京都教育大学は地域社会との連携を深め存在感のある大学となるべく多面的な取り組みを展開しております。その一つとして本校の名誉教授の先生方による公開講座を企画しました。開設記念として第1回は本学名誉教授の松井榮一先生による「光と色の神秘とその恩恵」のテーマで話されました。その後別表の通り9回開かれました。内容も豊富なため多くの市民の皆様方に受講して頂き好評を得ました。

このような大学の取り組みを地域の方々に理解していただき魅力ある京都教育大学になる事をめざしております。

京都教育大学名誉教授公開講座 一覧

回	テーマ	名誉教授名	日 時
1	「光と色」の神秘とその恩恵	松井 榮一	平成16年11月10日
2	生涯学習について	仲島 隆夫	平成16年11月17日
3	美術あれこれ	木代 喜司	平成16年11月19日
4	京都の文化を支えてきた石たち	井本 伸廣	平成16年11月27日
5	『白鯨』と『黒船来航』	岡本 克己	平成16年12月 1 日
6	小学校家庭科における指導と評価のあり方	加地 芳子	平成17年 1 月22日
7	子どもの生活と技術	桐田 襄一	平成17年 3 月 3 日
8	歴史としてのスポーツ	加藤 元和	平成17年 3 月10日
9	水辺にすむ菌類の探索	土倉 亮一	平成17年 3 月17日



第3回 公開講座「美術あれこれ」 木代喜司名誉教授

「e-Project@kyokyo (旧京教学生科研費)」 について

学生諸君の自主的で創造性豊かな研究活動を奨励する「e-Project@kyokyo」は、平成12年度より始まった本学独自の学生支援プログラムです。その企画から発表に至る過程は次のようになっています。

1. 学生によるグループで研究企画書を作成し応募する。
2. 学生生活に関する委員会各プロジェクトを審査し、採択を決定する。
3. 採択されたグループに対し本学教育研究振興基金より、研究に必要な費用が支給される。
4. 各グループは年度内に研究を終え、報告書を提出し研究発表会を行う。

従来は「京教学生科研費」という名称でしたが、平成16年度より「e-Project@kyokyo」という名称にしました。「e-Project@kyokyo」の「e」は“Education”（大学）の“Etudiant”（学生）によ

るプロジェクトという意味を表しています。そしてさらに、本学学生としての“Esprit”（才気、意気込み）と“Energy”（元気、活動力）を示してほしいという願いも込められています。

このプログラムが発足するまでは、「どれ程の応募があるのか」、「すぐにネタが尽きてしまうのでは」、「内容が低く無駄遣いになるのでは」等々、教職員間でもかなりの危惧がありました。しかし初年度から意欲的な企画が期待以上に集まったことは大きな驚きであり喜びでもありました。5年目となる本年度は採択数も10件となり、その内容も各々真摯で充実した研究でありました。

次年度からは教職員・学生による評価・表彰制度などを確立し、さらに充実した研究を支援する体制となる予定です。

平成15年度までの採択プロジェクト

	プロジェクトの名称
12年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ Communication Project. - 思いの相互作用 - ・ トレーナーって何だろう ・ ゴミ問題に関する意識改革のための研究と実践 ・ 体育施設の有効利用に関する研究 ・ 大学を基盤としたスポーツ環境の理想像を考える調査研究
13年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京教の自然を活かした学びの成果を地域の住民学校へ還元するための試み ・ ゴミ問題に関する意識改革と環境ISO認証取得を視野に入れた研究 ・ 御苑内迎賓館建設地の環境評価 ・ 現代ビジネスのニュートレンド
14年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京都市のゴミ分別とリサイクルの調査及び改善策 ・ 自然と友達になろう ・ 起校家研究会 - CS (チャータースクール・コミュニティースクール) が変える公教育 - ・ Javaやi-appliを用いた、鉄道駅情報データベースシステムの開発 ・ アナログ楽器とコンピューターミュージックを融合した新しい音楽の創造
15年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 京教発 - EM革命 - ・ 全国のごみ有料化実態調査 ・ 科学技術の基本、ここにあり - 理科実験教材の開発 - ・ スクールボランティア推進プロジェクト ・ 棚田に保存を問うてみる - 景観・伝統を守る意義 -

平成15年度に行った研究発表会

日 時： 平成16年3月15日（月）
 場 所： 共通講義棟（F棟）F16講義室
 司会進行： 理科教育専攻 2回生 亀田 直記
 プログラム：
 13:30～13:35 開会挨拶 学生生活委員会委員長（教務・学生指導担当副学長）
 13:35～13:55 発表及び質疑応答 科学技術の基本、ここにありー理科実験教材の開発ー
 13:55～14:15 発表及び質疑応答 京教発ーEM革命ー
 14:15～14:35 発表及び質疑応答 スクールボランティア推進プロジェクト
 14:35～14:45 休 憩
 14:45～15:05 発表及び質疑応答 全国のごみ有料化実態調査
 15:05～15:25 発表及び質疑応答 棚田に保存を問うてみるー景観・伝統を守る意義ー
 15:25～15:45 発表及び質疑応答 起校家研究会ーCS（チャータースクール・コミュニティスクール）が変える公教育ー ※
 15:45～16:00 総 括 学生生活委員会委員

（※は平成14年度に採択されたプロジェクト）



平成16年度の採択プロジェクト

プロジェクトの名称	代表者氏名	（所属、回生）	助言教員氏名
（続）京教発ーEM革命ー	岡 崎 圭	（社会文化専攻 4回生）	坂東 忠司
科学技術の基本ここにありー理科実験教材の開発ー	長谷川 清香	（自然科学コース 2回生）	芝原 寛泰
動作解析による投球・打撃フォームの科学的分析	末 長 浩 一	（スポーツ・健康マネジメント専攻 3回生）	沖花 彰 和田 尚 榎本 靖士
オリジナルミュージカルの創造	岡 田 あゆみ	（情報音楽専攻 3回生）	大澤 弘之
肉体言語化計画	若 林 龍	（美術科教育専攻 3回生）	岩村 伸一
東山の屋外広告規制を参考とした伏見の景観改善案	小 林 正 明	（地域環境学専攻 3回生）	石川 誠
後世へつなごう、巨椋池の記憶	蔵 下 美 華	（社会文化専攻 3回生）	西城戸 誠
小編成吹奏楽部支援プロジェクト	北 村 敏	（数学科教育専攻 4回生）	本間 友巳
今求められる教師像ーカリスマ体育教師原田隆志先生を招いてー	岡 崎 圭	（社会文化専攻 4回生）	高乗 秀明
タイ文化理解推進プロジェクト	浜 口 優 子	（理科教育専攻 4回生）	芝原 寛泰

平成16年度の応募要領

・ 援助金額

プロジェクト1件あたり15万円程度とし、採択は10件程度を目処としています。

※援助金を直接交付するのではなく、研究に必要な物品や交通費、印刷費などを援助します。

・ 応募要件

(1) 本学の学部学生によりグループを構成してください。

(2) 本学教員の中から助言者として指導いただける先生の承諾を得てください。

(3) プロジェクトの企画及び運営は学生グループが自主的に行ってください。

(4) プロジェクトは平成17年2月28日（月）までに終了し、報告書を提出するとともに、平成17年3月に行う発表会に必ず参加してください。

(5) プロジェクトはグループ構成員の卒業論文や卒業制作と直接関係のある内容としないでください。

※プロジェクトの学生グループの構成は、所属専攻等にとられる必要はありません。昨年度採択されたプロジェクトを継続して行うことも可能です。

・ 応募方法

プロジェクトの目的や実施計画などを記載した「企画書」を学生課に提出してください。

・ 審査方法

プロジェクトの意義及び独創性、実施計画と実施方法の妥当性などについて、学生生活に関する委員会で審査し、採択の可否を決定します。

・ 審査結果

掲示により発表します。

・ 報告書及び発表会

実施報告書の提出と平成17年3月中旬に行う発表会参加が義務付けられます。（実施報告書は本学ホームページに掲載します。）



プロジェクトで活動した学生から

科学技術の基本、ここにありー理科実験教材の開発ー

理科教育専攻 3回生 井上 健

私たちは「e-Project」で「青少年科学の祭典（京都大会）」に参加して、子どもたちに科学の楽しさを伝える活動を行っています。昨年度は「クリップモーターの作成」「フェライト磁石を使ったリニアモーターカーの実演」「ちょこまか振り子」「卵が浮くってほんと？～万華鏡作り～」「ブラックボックスの作成」、今回は「押し花のしおりを作ろう」「ふうせんで遊ぼう～大気圧を感じよう～」をしました。

「押し花のしおりを作ろう」では、紅葉・百日草・キバナコスモス・菊などの植物を用いました。植物の乾燥を早めるためにアイロンを用いました。しかし、小さい子どもたちには焼けどをしてはいけなくて、保護者の方や私たちが手伝って作業を進めました。乾燥した植物は、ラミネーターで挟み植物の名前と自分の名前を書いてしおりにして完成です。アイロンは危ないものだという認識が私たちの中ではあったのですが、実際にやってみると自分からやってみたくらいという子どもたちがたくさんいました。危ないから駄目だと言って使わせなくするのはではなくて注意しなければいけないことを教えてから実際に使わせてみるのが大切なんだと、子どもたちから教わりました。保護者の方もしおりにできるということで子どもたちに負けじと頑張っていました。中には一人で2つ3つ作っていく子どももいました（笑）

「風船で遊ぼう」では、「大きく膨らませた風船と小さく膨らませた風船ではどっちの力が強いかな？」「はずかしがりやの風船をお湯を注いだガラスびんの口にはめて、ガラスびんを冷やすとガラスびんの内側に向かって引っ込んでいく。」という2つの演示実験を子どもたちの前で行いました。風船の実験ということもあって低学年の子どもたちがたくさん集まってきました。みんな私たちの実験に釘付けでした。



図2：風船で遊ぼうの様子

子どもたちに科学の楽しさを伝えるこの活動を通して、私たちも子どもたちから多くのことを学んでいます。「e-Project」によって、子どもたちが家に帰っても科学の楽しさを実感することが出来る教材開発ができると思います。科学と触れ合う機会をもっと増やしていくためにも、この活動を引き続き行い、子どもたちの興味・関心をくすぐる教材開発をしていきたいと考えています。

(続) 京教発—EM革命—

社会文化専攻 4回生 岡崎 圭

昨年に引き続き、私たちはEM (Effective Microorganisms—有用微生物群)の研究を行いました。2年目ということもあり、EMの使い方などはよく理解しており、昨年より内容の濃いものになりました。

今回の主たる活動は、①学内の池の水質浄化、②学園祭で出た生ゴミを肥料にかえる、③学内の研究室の生ゴミを回収する、④生ゴミでできた肥料を畑で使い作物を育てる、⑤学内のトイレにEMのスプレーを設置する、⑥学園祭でEMのブースを設置しEMを紹介する、でした。

そして、今回の成果は予想を上回るものでした。特に水質浄化とEM肥料を使った大根栽培実験は大きな成果を出すことができました。水質を調べることはとても難しく、今回取り入れた透視度はそういった意味ではかなり客観性を高めることができたと思います。EM肥料は成長の早さが目に見えてわかり、実験することがとても楽しかったです。その大きな要因は、2日に1回きちんと水やりを続けることができたからだと思います。

今回は、昨年のメンバーとはまた違う新しいメンバーで集まりました。1回生も積極的に参加してく



れ、EMに興味を持ってくれました。そのおかげで昨年できなかった活動を全てやりきることができたのだと思います。また、2年目ということもあり、昨年使った本や備品をうまく利用することができました。昨年の反省も生かすことができました。これが長いスパンで研究した場合のメリットだと思います。

今回「e-project」に応募しようか迷っていましたが、やることによって昨年の研究をより深いものにすることができ、新たにEMに興味を持つひとを増やすこともできたので、とても満足しています。最後まで協力してくれたメンバーと助言を下された坂東先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。この「e-project」をもっと学生が知り、たくさんの自発的なプロジェクトが生まれることを期待しています。

オリジナルミュージカルの創造

情報音楽専攻 3回生 岡田あゆみ



昨年11月23日に、本プロジェクトではオリジナルミュージカル『銀河鉄道の夜』を本学講堂にて公演しました。当日は学内、学外合わせて216名の観客が来ていただきました。

音楽科の1回生は毎年、前期に「基礎セミナー」の授業で創作オペレッタを創作・上演しています。今回は授業の枠を離れて、より「舞台」というものを突きつめ、自分達の「舞台」を創り上げてみたいと思った3回生の有志を中心に企画を立て、「オリジナルミュージカルの創造」として「e-project」に応募しました。企画が採択されてからは徐々にプロジェクトメンバーを集め、最終的には音楽科の1～3回生の有志を中心として、約30名近くのメンバーで公演を行いました。



今回オリジナルミュージカルということで、脚本、作曲、演出、照明、衣装、舞台美術、広報、その他舞台に関わることを全て自分達の手で一から作り上げて行きましたが、やはりその作業は一通りのものではありませんでした。総合芸術である「舞台」には私達が普段学んでいる音楽以外の要素が多

く、試行錯誤しながらの作業でした。

また、プロジェクトが進むにつれメンバーも増え、舞台を完成させるためにしなければならない事が次々に見えてくる中で、メンバーの団結と、役割分担して組織的に動く事の重要性がさらに大きくなりました。その点においては、企画メンバーである3回生がプロジェクト期間中に教育実習を経験したこと、またメンバー全員が教育大生として、教育、つまり「人間」というものに興味を持っているということが大きな意味を持ったと思います。



プロジェクトを振り返ってみて、計画性や役割分担、進め方等において、振り返って反省することも多いですが、プロジェクトに関わった約8ヶ月という期間は、11月23日というたった1回限りの公演を成功させるためにかけた月日であったと同時に、その一日一日が「学び」「成長」「人間と向き合う」日々の積み重ねであったと思います。プロジェクトに関わった全ての人々にとって、このような経験が今後の成長に繋がってゆくということが、このプロジェクトの最大の成果になるのではないかと考えています。

現在は3月の研究発表会に向けて、公演当日に観客のみなさんに書いていただいたアンケートと、プロジェクトメンバーへのアンケートをもとに、研究結果をまとめつつ、公演の記録としてのビデオ編集を進めています。

THE TEACHER'S MISSION

教員研修留学生

**Ernesto Urbano Romero Rojas
Peru.**



I always had dreams, since ever I was a child. In spite of the life difficulties I hardly never put them aside. On the contrary I struggled every day in order to accomplish them. Obviously, one of them became a true when I came to Japan. Therefore I have to thank to God, my mother Efigenia Rojas Baltazar, my father Urbano Romero Marmanillo, my entire family, friends and all the people for such a important support. Certainly, before coming to Japan I was full of misconceptions about it, which I got clarified while my meaningful staying. Now, I have a clearer image of this amazing country. Every day there was something new to learn. So, learning became my biggest purpose. Because it is said that the main purpose of Education is to raise the lives of our students, and I think the best way is learning as much as we can in order to have a wider vision of the world and serve our pupils more effectively. So, I did it, since the very first time I landed in Japan including the Japanese Language and Teacher Education which I can assure were largely different from my own. But these differences themselves made them, more interesting to know.

However, my greatest mission had already been completed since ever I took my way to Japan in order to show my future generation that a dream only comes true when you wake up and go for

it. Regarding my researching topic and the achievement of the target language, I could get a meaningful learning, from the alive example of my Adviser ASAI Kazuyuki as well from the very good professors, namely SAWANISHI Sensei, SAKATA Sensei, KIBA Sensei and so on. I also learned from the students and my direct and active class observations. Up to now, I can assure that the Teacher Education in Japan is suited to the change of the period. So, the curriculum is continuously re-evaluated to promote the faculty development, for expanding the pre-service teacher's specialty as well for enhancing their field knowledge and technical abilities. Regarding the Humanistic Education I could rescue important values in the teacher staff as well in the students, namely the responsibility, punctuality and principally the spirit of unity and cooperation among them. These values are reflected in their optional participation in different clubs the University has. Up to now, I can say that I got my objectives. However, while my staying in Japan I got a new purpose which is the International Understanding. It gave me the chance to meet people from all over the world. And it itself became an interesting field to go deep in, in order to rest misunderstandings and sharing pleasant moments with them.

However, this learning trip won't last forever. I want to thank to the Ministry Of Education of Japan and its embassy in Peru, for giving me this amazing opportunity to enhance my professional improvement

and to understand better the humankind. So that we can build a peaceful world. All this precious learning that I achieved within and outside of a classroom will be shared with my students and people of my country. Because I was only a sort of cloud that was loaded to rain and it was and will be the mission of my life. Thank you very much.

教師としての使命

私には、子どもの頃からの夢がある。人生には様々な困難が伴うが、私はその夢から目をそむけることはしなかった。そして、それらを達成するために、毎日一生懸命努力してきた。その夢のひとつは、日本に来ることによって叶った。それゆえ、神、家族、友達、支えてくれた人々すべてに対し感謝の気持ちで一杯である。確かに日本に来るまでは、日本に対する誤解が多くあった。この国で有意義な時間を過ごすことによって、その誤解がほとんど解け、今ではこの素晴らしい国に対して、確かなイメージを持っている。

どこにいても学習し続けるということ自体が、私の大きな目的となった。なぜなら、もし私たちの生徒の生活を向上させることが教育の主な目的であるなら、そのための最もよい方法は、世界の広い視点を持つために、またはより効果的に生徒に教えるために、私たち教師自身ができる限りたくさんのかことを学習するということである。それは、来日初日から私に身に降りかかった。日本の言葉や教員養成は、私の国のものとは大きく異なっていた。しかし、この大きな違いによって私は、それらについて知ることがさらに面白くなった。

しかし、私が自分の思うようにして日本に来たことで、自分の夢に気づき、その夢のために努力することで夢はかなうということを未来の世代に示すこ

とができ、それによって私の大きな任務は果たすことができた。

論題研究に関しては、指導教員である浅井先生という生きた手本からだけでなく、坂田先生、沢西先生、木場先生というすばらしい諸先生方や授業見学や参加をするよう言っ

てくれた学生から多くのことを学ぶことができた。今、日本の教師形態は変革の時期にきていると思う。教師の特色や個性だけでなく専門知識や教育技術を高めていくために、カリキュラムはたえず見直されている。加えて、人間性に関して、教授や学生から責任、時間を守ることを、そして主として協調性や協力の精神の重要性を学んだ。それは、彼らが自由選択であるにもかかわらず、大学にあるクラブに積極的に参加していることに反映されていた。今まで、私のかねてからの目標について述べてきたが、日本滞在中に新たな目的ができた。それは、世界中の人たちについて知るということである。そして、その国際的な理解を得ることによって誤解がなくなり、楽しい時間を共有することができる。

しかしながら、この留学はいつかは終わってしまう。職業上の進歩や理解、さらには人間として成長することができる機会を与えてくれた日本の文科省やペルーの日本大使館に感謝をしたい。平和な世界を築くために、教室の外で私がいろいろ学んだことすべてが、私の生徒や私の国の人たちと共有されるだろう。私は雨をもたらず雲のような存在であると考えている。したがってそのような自分にとって、私が学んだことを伝えるということは私の人生における大きな使命である。



常識の非常識

附属環境教育実践
センター教授 荒木 光

人間の生きる最大の目的は、子孫を残し続けることである。あらゆる生物はこの目的を果たすために最大の努力をし、時には己が身を犠牲にすることさえある。したがって、生物の一種である人類もこの目的を叶えることを、無条件に最優先させるべきである。そして、環境教育も決してその例外ではない。

1 環境問題の根源

“エネルギー保存の法則”から資源を使わないと生物は生きていけないということが導き出せる。また、“エントロピー増大の法則”というのがある。これは資源を使えば必ず廃棄物が出るということを意味している。

地球上に生物が発生したのは30億年前といわれている。それ以来すべての生物はこの2つの法則に縛られて生きてきた。しかしながら、生きていくのに必要な資源を自らの手で枯渇させてしまった生物や、自らの出した廃棄物に埋もれて滅亡してしまった生物はいなかったようである。それは、排出した廃棄物が地球の大循環にのって最終的にはまたもとの資源に戻ったからである。この循環を断ち切らなければどの生物も資源枯渇問題や環境問題で滅亡することはなかったといえる。人類はこの循環を断ち切っているから環境問題が発生し、これ以上生き続けることを危うくしているのである。環境問題を解決する唯一の方法は大循環を絶対に断ち切らない生活をするのである。それ以外の途は絶対はない。したがって、環境教育でまずなさねばならないことは“大循環を断ち切る生活を絶対にしてはならない”ということを経験することである。これは理屈だけではなく実行を伴うものでないと意味がない。地球環境悪化の現状を学んだり、その解決方法を学んだりしたとしても、問題の根源は人間の生活にあるのだから、それを改めることを最優先に教えないような環境教育は非常識としかいいようがない。まして、大循環を断ち切るような資源の使い方をしながら環境問題などを学んでいるようでは、非常識の極みと

しかいいようがない。

2 経済成長の意味

我々は物質的に極めて豊かな生活を享受している。それでも、もっと豊かな生活をしたいと思っている。そのためにもっともっと経済成長を続けて欲しいと思っている。それを実現するにはもっと多くの資源が必要である。成長率が高いほど使う資源量もそれに比例して多くなる。技術などの要素があるので完全に比例ということではないが、10%経済成長するには10%多くの資源が必要であるということは、エネルギー保存の法則から趨勢的にはいえる。

もし毎年10%の経済成長率を例えば500年間続けたとすると、その500年の間に使う資源量は最初の年に使った資源量のおよそ54垓倍になる。(1垓=1万京)これはもう天文学的数字である。地球誕生から45億年、生命誕生から30億年経っているという事を考えれば500年はほんの瞬間といえる。

その瞬間で天文学的数字の資源を使ってしまうのである。仮に、今日安定成長率といわれている4%としても、500年間に使う資源量は始めの年のおよそ85億倍強になる。これでも相当大きな数字である。これだけの資源が有限な地球上のどこにあるというのか。さらに成長率を低くして1%としても500年間に使う資源量は1.4万倍強になる。もし経済成長をまったくしなかったら500倍ですむところが、1.4万倍以上の資源が必要であるということである。それもたった500年間である。1%の経済成長であれば、我々の実感としてはまったく満足のいかない程度の成長率である。それでも膨大な資源が必要であるということである。

資源には地球の循環にのる資源（フロー性資源）とのらない資源（ストック性資源）とがある。問題なのは、我々の生活を楽にしてくれる資源のほとんどはストック性資源か、フロー性資源を循環にのらないような使い方するということである。なぜな

ら、地球の循環にのるように資源を使うことはまことに骨の折れることだから、楽をしたいときにはそのような使い方はまずしないからである。ということは、10%の経済成長を500年間続ければ、はじめの年に出たその85倍強の廃棄物が地球上に残るということになる。そうなれば地球の生態系はいったいどうなるのであろうか。

経済成長を少しでも続けられれば、必ず資源枯渇問題と廃棄物問題に直面する。そう考えると、もう経済成長などできるはずがないという結論になる。それにもかかわらず我々は持続的経済発展と称して経済成長を大いに期待している。人類の生きる最大の目的から考えると非常識としか言いようがない。

3 民主主義の本質

過去の価値観を捨て去った時、未来の人類と共に生きる術も同時に放棄した。その結果、今この場にいる人間が幸せであることが絶対的な“正義・善”となった。最大多数の最大幸福はこれをもとに成り立っている。そして、今この場にいる人間の大多数が、楽をすることが幸せであると思ってしまった。

教育の始まりはギリシャ時代に求められるといわれている。その当時、教育を受けていたのは市民の子弟である。市民は生産に従事しない、いわば貴族であり、生産の担い手は奴隷であった。汗水流して苦労して働くのは奴隷であるから、汗水流して働くことを蔑視するという価値観が教育を受けることによって身につけてしまった。その教育の伝統が今日まで続いている。教育を受ければ受けるほど楽をすることが良いことであり、汗水流して働くことを蔑視するという価値観が常識となっていった。

人間は教育を受けることにより、もっと楽をしたいと考え、産業革命によって科学の力を生産の場に積極的に使い始めた。科学の発達に支えられた高度な産業技術のお蔭で生産は飛躍的に増大した。その結果人口が未曾有に増加した。高度な産業技術は科学のみが支えているのではなく、資源が支えているのである。今日、躊躇することなく生態系を破壊しながら資源を手に入れているが、有限な広がりしかない地球上の資源は必ず枯渇する。資源がなくなれば産業技術は何の役にも立たない。科学も科学技術も産業技術も資源の代わりにはなり得ない。産業技術が役に立たなくなれば、増加してしまった何億人もの人口を養い続けることができない。日本列島が循環型産業だけで養える人口は3000万人程度である。残る9000万人は死ぬしか仕方がない。しかし

そうなった時、産業技術の恩恵を受けた人間はもうこの世にはいないので、責任を取ることはない。未来は、今よりもっと豊かで素晴らしい社会になると言っておきながら……。

4 人間は循環型の資源である

循環型のものを食し、子孫を残し続ける限り、人間も循環型の資源である。まず、循環型でない産業を拒否し、循環型の産業で作られた物だけを消費する生活を確立すべきである。つまり、基本的には工業を拒否し、農業などの価値を重視することである。

また、循環型の生活をするために己の質を高めておくことはできる。持っている知識を適切に応用して、循環型の資源だけで生きていく力を知恵とすることができる。つまり知恵をつける教育を最優先にしなければならないということになる。“具体”で教育すればわかりやすいが応用が利かない“指示待ち症候群”の人間が育つ。“抽象”で教育すれば知識ばかり増えて何もできない人間になる。知恵をつける教育は半具体、半抽象による教育である。これが“読み・書き・そろばん”教育である。この教育を重視し、実践することを、環境教育が最優先になさねばならないことである。

産業技術が何の役にも立たなくなったとき（資源がなくなってきたとき）でも生きていける人間（循環型の生活が出来る人間＝地球環境を破壊しない生活が出来る人間）を育てておくのが、今日なさねばならない環境教育である。それは、人間が汗水流して働くことは貴いことであり、楽をすることは罪悪であるという価値観を持つ人間を育てることもである。そして、循環型産業の“農業教育”と“読み・書き・そろばん教育”を最優先にやらねばならないという考えを常識に思わなければならない。

効率的であると思っていることは、循環型でない資源を使っているから効率的で楽なのであるということに気づくべきである。環境破壊の現実を知ることや、そのメカニズムを研究することやその解決方法を研究することは大変意味あることではあるが、その過程で循環型でない資源を何のためらいもなく使っているのであれば、非常識といわざるを得ない。

パソコンの電源を入れるごとに、その行為が、地球の生態系を完全に破壊尽くして、2・3世代先の何億もの人類を確実に殺戮していることを自覚すべきである。

みなさん、生物の一種である人類の一員として、恥ずかしくないですか。

30年を振り返って

音楽科教授 西 勇夫

1973年に赴任以来、早くも30年以上が経過した。過去を振り返らない性分なので、赴任当時何が起きていたか定かには覚えていないが、この年に第1次オイルショックがあり、トイレットペーパー騒ぎがあった。この出来事を境に日本全体が「それいけモード」になり所謂「バブル」でピークを迎え、そして「バブル崩壊後」は不透明な時代になり現在に至っている。この30年は良くも悪くも変化の激しい時代だった。本学もこれらと無縁ではいらなかった。

第1次オイルショックの後間もなく「共通一次試験」なるものが導入され、国立大学の受験希望者は新たな関門が課せられることになった。この導入を巡って当初は資格試験だと説明されていたが、いつのまにか合否判定に使われるようになっていた。詳しくは覚えていないが1期校2期校が一本化されたり、分離分割になったりと仕組みの変化が始まり、同時に大学入試の複雑化が始まったと思う。そして私立大学も参加して（建前上は各大学の意志で）現在の「センター試験」の形になっている。これが未来永劫に続くのか大変気になる。この一連の試験では、文字を書くのは自分の名前だけである。答案といながら作成作業はマークを塗るだけである。これが答案と言えるだろうか。矛盾を挙げれば数々あるが、ここでの本旨ではないので止めておく。私が気になったのは、学生達の思考回路の変化である。端的に、大筋に影響のない細部にしか目が向かない傾向がだんだん出て来て、細分化やその精緻化に価値がおかれるようになったことである。もうひとつは「どの程度やればいいのですか」という質問が増えていることである。言い換えれば、事の本質は何かを問うことや、自分で気の済むまで時間をかけてやろう、という意欲が減って来ていると私には見える。これが単なる1大学の傾向ではなく、日本全体がこの傾向に走り、大局を見ようとしなくなるならば大きな問題であろう。ただ若さのもつエネルギー

は無限に近いものがあり、この数年間に意欲を感じさせる学生が音楽科に限らず、ちらほらと見られるようになったことは嬉しいことである。それにしても何時までコンピュータ採点を続けるのだろうか。

さて30年前に戻ろう。オイルショックの後、ほどなくして本学の教員採用率が落ち始めた。その傾向はずっと続き最近にまで至っている。私は犯人捜しをする気はない。集団のもつエネルギーの質がこのような現れ方をしているのだと観ている。私自身は集団のエネルギーにピッタリとはマッチしていなかったように思っている。そのためか、いつしか物事は良くも悪くも見えるものらしいという見方をするようになっていた。

18歳人口が205万人のピークを迎えるころに既に本学の志願者が減少傾向になっていた。増える18歳人口を吸収するためにゼロ免課程を作ることになり、情報音楽専攻を立ちあげることに係わった。この直後、専修免許制度が発足し大学院修士課程を作らざるを得なくなった。この頃から自分の勉強よりも会議やその準備に割く時間が増えてきて、大学の教員であるための資産としての研究や研鑽を積むことが難しくなってきた。一方で、命を縮めてまでも頑張らなければならないものが、どれだけあるのだろうかとも考えるようになった。これは現在もそうである。

そして間もなく教員養成課程の入学定員を5000人削減する方針が打ち出され、ここから国立大学の規模縮小が始まった。12年度改組と呼ばれる一連の作業のための委員会に組み入れられたことは、降って湧いたようなもので、多少つらいこともあったが一緒に仕事をさせていただいた（当時の）教官や事務官とは楽しい時間を共有させてもらった。ここから解放されホッとするまもなく、降って湧いたように附属桃山小学校の校長職を併任することになり内心困った。教員免許も無いのに校長！この制度間違ってます。でも2年半はこれまた楽し

く過ごさせていただいた。480人の孫と心暖かい先生方や事務官の方々との交流は、私には珍しく思い出に残るものとなるだろう。

2004年4月に法人化が実施された。三たび降って湧いたように附属学校部の責任者、さらに降って湧いたように学長選考会議の責任者になっていた。この間は大学・附属学校園の在り方や、組織論、価値観などについて実に得難い勉強をさせてもらった。

人は皆移ろうものらしい。私の所属する音楽科の教員もかなり入れ替わり若返った。大学教員全体も同様である。総合科学課程の発足は本学の冬の時代の到来であったが、「冬来りなば春遠からじ」。冬

場は活力を蓄える時期なのだと思う。学校の活力は、教職員も学生・園児児童生徒も、世代を超えて世に誇れる目的（for example, to make people happy）を共有することから生まれると私は思っている。このような目的に向かって組織的に得意技を磨きあげていくなれば、春は間近に訪れるのではなかろうか。

この30年余、私にとって勉強し学び取る機会が多かったことは確かで、大学・附属学校園の関係で出会った様々な方々との交流は貴重なものである。願わくば本学が愛され信頼される教育大学として新しい歴史を歩んでほしいものである。



海外見聞録

韓国の春川（チュンチョン） 教育大学校との交流

学長

村田 隆紀

平成16年7月28日と29日に、韓国の春川（チュンチョン）教育大学校を訪問し、学術交流と学生交換に関する交流協定に調印してきました。訪問に際しては、この交流の準備に貢献していただいた教育学科の堀内孜教授に同行していただきました。

チュンチョンは江原道にある韓国最北の都市で人口は約20万人ですが、街の中を大きな川が流れ、緑の豊かなところですよ。こういう紹介をするよりも、「冬のソナタ」の舞台、といった方が、わかりやすいかも知れません。ここに国立の教育大学校があり、主として小学校教員の養成を行っています。この教育大学校は、最近韓国で最も優れた教員養成機関と評価されたとのことですよ。

この大学との間の交流は、昨年秋頃から国際交流委員会で検討されてきましたが、今年の3月には3人の先生に訪韓していただいて話をまとめ、今回の調印に至ったものですよ。

協定締結に際しては、大学の主な役職者が全員出席する中で、李在鳳総長と私との間で日韓両国語で書かれた協定書4部に調印しました。李総長からは、この協定の締結によって、新しい可能性が開けたので、今後積極的に交流していきたいという抱負が述べられました。私からは、本学にとって5番目の協定校であるチュンチョン教育大との間で、内容のある交流を進めていきたい、特に中期計画に記した「アジアの教員養成に協力する」ことを目指し、教員と学生の交流を深めたいと答えました。また李総長には是非とも本学を訪問していただきたいとお願いしました。

その後12月には、李総長が本学にお出でになり、今後の学生交流について、具体的なプランを示されました。平成17年度には、このプランに従った交流プログラムがスタートします。



上海師範大学創立50周年 記念に招かれて

学長

村田 隆紀

平成16年10月13日から17日まで、上海師範大学の創立50周年記念のお祝いに招待され、国際交流副委員長の駒田先生と、事務局総務課の石坪企画広報室長と一緒にに行ってきました。

上海師範大学は本学にとっても最も古い交流大学で、1993年から協定を結んでいます。今年は中華人民共和国が建国されて55周年にあたるので、大学は建国5年目で創設されたこととなります。当初は上海師範専科学校として出発したものが、1958年に上海師範学院となり、1972年に5つの師範学院を合併して上海師範大学となりましたが、その後師範学院の名称に戻った後、1984年から再び上海師範大学となりました。1994年以降は上海にあるさまざまな専門学校などを吸収して、現在では総面積117万平米の2つの大きなキャンパスを有する、学生数数万人という総合大学になっています。

このお祝いには、アメリカ、カナダ、フランス、ドイツ、韓国、日本、台湾の交流大学の学長が多数参加しました。日本からは本学の他、東京学芸大学の鷲山恭彦学長をはじめ、9つの私学からの参加者がありました。

プログラムは13日の夕方の歓迎晩餐会からはじまりました。この晩餐会では、日本の大学の中で最も古くから交流をしていることを理由に、外国の大学を代表して私があいさつするように求められたことは、大変名誉なことでした。あいさつでは、「50年は言葉にすれば一言であるが、建国から5年後に創設されたこの大学がこれまで歩まれた道は、決して平坦なものではなかったと思う。数々の困難を乗り越えて、このような立派な大学に発展されたことに心から敬意を表する。本学との間では学生と教員の交流を毎年積極的に行っているが、優秀な学生と、意欲溢れる若手教員に来ていただいている。これからもこのつながりを一層深めたい。次の節目のお祝いとなる2054年には、この大学が世界のト

ップクラスの大学になっていることであろう。」とお祝いの言葉をのべました。

14日は交流大学の学長達によるフォーラムが開催されました。この会には上海師範大学と姉妹関係にある中国各地の師範大学の学長達も多数参加しました。ここでは学長達がいま取り組んでいる課題について、15分間に自由に発表する形式で、会が進められました。参加者には事前に原稿提出が求められていましたが、それらは中国と英語（一部は日本語の原稿のまま）に訳されて、冊子が準備されていましたので、共通の理解をすることができました。私は「国立大学法人となった京都教育大学のめざすもの」と題した発表をしました。

14日の夜には、師範大学のグラウンドで主として学生達によるお祝いのパフォーマンスと花火大会が催されました。この催しには、音楽、美術、体育の学生たちが大活躍し、雰囲気盛り上げていました。

15日の10時から体育館で50周年記念式典が盛大に行われました。式典はすべて中国語で進行しましたが、兪立中学長の演説は、いつもの穏やかな表情や口調は影をひそめ、熱気のもった語調で50年の歴史をふまえて将来に向けた決意表明をされたことがよくわかりました。外国の大学長の代表には、アメリカのWest Chester大学のMadelene Adley学長が、心のこもったお祝いの言葉を述べられました。式典の間に、退職された教師の方々への花束が送られたり、学生代表のあいさつがあるなど、内容も豊かに企画されていました。式典の後、50周年を記念して立てられた歴史資料館の開館式が行われ、その中では50年の歴史がわかりやすく展示されていました。その夜には、上海を流れる黄浦江の遊覧船を借り切ったディナーパーティが催され、美しい夜景を楽しみました。

16日には新しい奉賢キャンパスの訪問と上海市内見学で、その夜には7時からオーケストラの演奏

を含む芸術的な催しが盛大に行われました。この催しのテーマは「桃李頌 師大情」で、英語の訳は“Faith in Shanghai Normal University”でしたので、学生と卒業生による上海師範大学賛歌とでもいうべきものでした。そして夜9時からは送別パーティが催され、すべての行事を無事に終わりました。

滞在中は好天に恵まれ、特に15日は雲一つない快晴のなかで祝賀行事が行われました。それぞれの外国からの参加者にすべてボランティアの世話役が付き、一切の面倒を見てくれました。私達には

1997年に短期留学生として私の研究室に在籍し、現在は上海師範大学の理科教育の講師となっている郭長江さんと、本学の大学院を卒業して現在化学の講師をしている林静容さんが、世話をして下さいました。特に郭さんは、空港の出迎えから出発の見送りまで、全面的にお世話になりました。また、到着した日の夕方には、本学に留学して帰国した同窓生達が、同窓会を開いて我々を歓迎してくれました。

今後もこの大学との交流はますます深まっていくことでしょう。



附属学校園だより

みんなで作る フレンドキッズタイム

附属桃山小学校
副校長 川端 建治

体験の機会が減った異年齢集団の関わりを活性化するために、本校では、学校生活の中に学年縦割りの集団による活動を取り入れている。前に紹介した「つゆくさ」グループ（1年生～6年生の異年齢集団）の活動がその中心であるが、他にもさまざまな場面に、異年齢の交流の機会を設定している。

フレンドキッズタイムは、4年生以上の子供たちによる「共通の興味や関心を追求する」とこと、「学校生活の充実と向上のために協力して取り組む」ことをねらった、高学年児童の自発的・自主的活動の時間である。金曜日の6校時になると、子供たちは、6年生をリーダーとして学校全体を活動の場として、クラブ的な活動（2・3・4週）と委員会・ボランティア的な活動（1週）を行っている。

新年度の学期初めになると、度々高学年集会が開かれ、今年の活動を決めるための話し合いが行われる。子供たち一人一人が互いにアイデアを出し合

い、「一緒にやったら楽しいだろうな」と思うことや、「みんなの学校生活を良くするために、やってみたいな」と思うことを決めるのである。教師側で決めたことをやらせるのではなく、あくまでも子供たちの自発的な考えを中心に据えて、子供たちの希望によって活動内容が決められる。

4年生以上240人から出されたアンケートによるアイデアは、児童会の各学級代表委員によって集められ、児童会の運営委員によって整理され、実施可能なものに絞られる。今年は、20のクラブと11の委員会が示された。そして、これが再び高学年集会に出され、それぞれの希望によって所属を調整するのである。担当教師の人数やグループの人数を考えながら、活動可能な内容と構成メンバーを決めていく話し合いは、結論が出るまで大変な時間とエネルギーが必要となる。教師は、子供たちの力を信じてできる限り前に出ないで、話し合いを見守る立場に徹している。

話し合いが深まってくると、人数の少ないグループからは、自分たちが目指している活動の魅力や学校生活にとっての重要性等を全体にアピールして、意欲的に勧誘を始める子も現れてくる。

異年齢の子供たちが、共通の目標を持って取り組むふれあい活動の中で、人と交わる力を育むと共に、自分たちの学校生活を自分たちでより気持ちよく楽しいものにしていこうとする姿勢を育てることが、フレンドキッズタイムの重要な目的である。

平成16年度教育実践研究 協議会が終わりました

附属京都小学校
副校長 多田 光利

去る11月19日(金)、20日(土)に「特色ある学校づくり『新学校構想』その2ーキャリア教育を中核にすえた小中一貫カリキュラムー」という研究主題のもと、附属京都中学校と共同で研究協議会を開催いたしました。北は北海道、南は九州、沖縄より二日間で延べ約1600名もの先生方にご参会いただきました。前年度に比べ今回の参会者の先生方に特徴的だったのは、各地域の教育委員会関係の方の参加が多かったということです。それだけ、本校と京都中学校が九年制義務教育学校の設立に向けた研究でその中心としています、「キャリア教育」に関心があるのだと思います。19日(金)、第一日目にはキャリア教育の第一人者でもられる文政大学名誉教授で日本進路指導学会名誉会長も務めておられる仙崎 武先生にご講演をいただきました。講演の中で先生は、『『キャリア教育』とは、自分が今まで生きてきた道をもう一度見つめ、見つめただけで終わることなくそこから今自分は何が出来るのかを考え、将来の展望を持つようにする。それを小学校の段階から教師もそのような観点でもってすべての学習活動を支援していかなければならない。』と話されました。



研究発表協議会受付付近風景

- 小中9年間を、初等部、中等部、高等部と分けるわけですが、今年度は中等部（小学校5年～中学校1年）の指導体制の充実に向けての第一段階として、
 - 小学校教員1名が、7年生のクラス担任をする。
 - 小学校教員2名が、7年生の教科担任として授業を受け持つ。
 - 中学校教員6名が、5年生、6年生の教科担任として授業を受け持つ。
- という取り組みにも着手しました。



アントレプレナー公開授業の様子

「国際理解学習」と 「国際交流活動」

附属桃山中学校 多羅間 拓也
副校長

本校では、以前から、留学生との交流会とか、青年海外協力隊員による講演会など、各学年で国際理解教育の取り組みをおこなっています。帰国・外国人生徒の特設学級では、彼らの異文化体験を見直し、それを自分の言葉で発表する機会として、毎年「帰国スピーチ」を実施していて、これも国際理解をめざす大切な取り組みです。今年度のスピーチでは、フィリピンから帰国した生徒が、マニラの「ゴミの山で働く子どもたち」に接した時の衝撃を、全校生徒の前で発表し、多くの生徒に感銘を与えました。ちょうどそのあと、彼のいる学級で、「フィリピンの危機に瀕する子どもたちの現状」と題した授業がおこなわれました。この授業は、「教育を考えるシンポジウム」（教育実践総合センター）の一環で招聘された、ロゼリン R. ペティロ 先生が、本校で特別授業をしてくださったものです。貧困が故に過酷な労働を強いられ、絶望的な環境で生活する子どもたちの現実に関し、生徒は大きなショックを受けました。

定期的におこなっている国際理解学習とは別に、本校ではさまざまな形で、同世代の外国人との交流をしています。インターネットを利用して、上海師範大学附属中学校と交流授業をしたり、メルボルン高校の生徒たちの学校訪問を受け入れたり、さまざまな国からの体験入学生を受け入れたりもしています。去年の10月には、キングエドワード7世校（英国シェフィールド市）の生徒たちの訪問を受け、貴重な交流の機会を持ちました。そもそもこの学校との交流は、同校からの体験入学生を長期間受け入れたことから始まっています。当日は、その体験入学をした生徒を含む約25名の生徒と引率教員の一行と、充実した一日を過ごしました。午前中、各学級で授業参加をしたあと、昼食をともにし、午後からは3年生との交流会、国際交流委員会の生徒たちとの伏見散策と続き、夕方は生徒会役員や有志生徒たちとの懇親会を持ちました。同世代の外国人との楽しい交流は貴重な体験でしたが、とりわけ、スピーチ、琴の演奏、合唱、ゲームなど、いろいろな準備を進めてきた生徒たちは大きな充実感を味わったようでした。

今年、本校の帰国子女教育学級は開設30周年を迎えます。この大きな節目を迎えて、帰国・外国人生徒を受け入れる学校として、本校の国際理解教育も国際交流活動も新たな展開を求められています。本校では、大学や地域との連携を深めながら、この課題に積極的に取り組みたいと考えています。ご支援を宜しくお願いいたします。



ボールルーム ダンスの授業

附属京都中学校 橋本 雅子
副校長

本校では、体育の授業でボールルームダンス（社交ダンス）を実施しています。ボールルームダンスは、オリンピック競技としても考えられていることから、広く学校教育の場にも取り入れていく方向で検討されています。ボールルームダンスの文化的意味と価値は、①踊る喜びの共有による相互理解、②生命の原点としての身体による表現活動、を特徴とすることにあり、特性は、①男女のペアにより踊り楽しむ、②一定のリズミカルな動きにのって楽しむことです。種類は、「スタンダード」モダンとも言いますが、男女が軽く接してホールドして踊る「ワルツ」「タンゴ」などと、「ラテン・アメリカン」ラテンとも言いますが、手だけでリードしたり、相手の目を見て踊る「チャチャチャ」「サンバ」「ジルバ」などがあります。

本校では、小学生も交えて、やさしいリズムから複雑なリズムへ、また、離れて踊る浅いコミュニケーションから接近して踊る深いコミュニケーションへ移行していけるような方法で学習に取り組んでいます。生徒たちは、基本的な簡単なステップ（アマルガベーション）を覚え、それらの組み合わせを工夫して独自の動きを考えて踊ります。簡単な動きを繰り返し踊るペアもいれば、複雑な動きに挑戦するペアもあり、それぞれのレベルに応じて踊ります。



はじめは、とまどっていた生徒たちもリズム（曲）が流れ出すと、自然に身体が動き出し、リズムにのって楽しんでいきます。

欧米では、ダンスを一つの教養として考えられています。礼儀や作法、そしてコミュニケーションを養う手段としてとても大切にしているそうです。そこで、以下にボールルームダンスを授業で行う効果をあげたいと思います。

- ① 正しい姿勢を保つことにより、日常生活にも効果があります。歩き方やプロポーションもよくなります。
- ② ルールやマナーを身につけることにより、他人やパートナーを尊重することができるようになります。男女が共同して行うことにより、協調性が養われます。
- ③ 人間関係や交友関係を広げ、コミュニケーションの力を高めます。
- ④ 海外に出かけたり、外国からお客様を迎えたときに、社交の場として楽しむことができます。

このような点で、現在取り組んでいる生徒たちは、国際人として、「ボールルームダンス」という教養を広めています。

カガミとしての 保育・教育

附属幼稚園
副園長

川端 智江

子どもたちの育ちに関わって起こってくる様々な問題について、親と教師が共に考え、学び合える場として、桃山地区3校園主催の子育て支援のための教育講演会を企画しました。演題「カガミとしての保育・教育」で、講師は園長の岩田純一先生です。親・保育者・教師は、子どもたちが育ちの過程で「自分を写し出すミラー（鏡）」として、また、「自分を創っていくときのモデル（鑑）」として、その育ちに大きな影響を与える存在です。またその逆に、子どもたちは、私たち大人の子育てのありようを写し出す鏡でもあります。両者の関係をふまえた枠組みの中で考えていくことの重要性を話されました。



そこで、今までは、親子で竹馬作りをしていたのを、子どもたちがいつも遊んでいる遊戯室で親・保育者が、協力し合って大人達だけで作ってみました。竹馬作りは、一人で作るには難しく、お互いが手伝い合うことでうまく出来上がります。作りながら、コツをつかんだ人が他の人に伝えたり、竹を持つ人とロープをくくる人で協力したり…。自分から困っている人に声をかけたり、できないことをお願いしたりすることは、結構勇気のいることのようにです。そのやりとりの様子をじっくり側で見ていた子どもがいたり、遊戯室の積み木で遊びながらチラチ

ラと気にしている子どももいました。言葉で子どもに「みんなと仲良くしてね」と言うだけでなく、大人がその姿を見せることの大切さを実感する機会になったことと思います。そのようにして完成すると、子どもたちが跳んできて大人に支えてもらって挑戦していました。そのうちに大人も挑戦し、たのしみ姿もみられました。



生徒が創る文化祭

附属高等学校
副校長

齊藤 正治



毎年九月中旬の金・土曜日に、本校の文化祭が開催される。この文化祭を担当するために立候補し、成立した前期執行委員会や、募集によって成立した実行委員会が中心となり、五月から企画を立案し運営していくのである。夏休み中に、各団は準備や練習を行い、九月初めに広告ポスターが貼り出され、パンフレットが配布される頃には、学校中が文化祭へと盛り上がりを見せる。

主な企画は、文化祭代々の目標である“クラスの団結を図る”ための「クラス企画」十五団の他に、音楽・ダンス等のコンクールやフリーマーケットを運営する実行委員会企画、有志による音楽やコント・手品などの有志企画などがある。写真は、クラス企画宣伝用の垂れ幕で、これらもコンテストの対象となっている。また、恒例となった裏千家のご指導による茶道部のお手前披露・接待をはじめ各クラブも参加し、文化系クラブを主に、発表・展示が行われ、日頃の活動内容や成果を披露する。

また、本年は、スーパーサイエンスハイスクールの成果を披露する意味で、科学実験の体験教室が実施された。一般参加の方々の真剣な眼差しが印象的であった。

更に、各クラブと三年クラス企画では、食品やゲームの模擬店が出る。メイン会場である校舎中央の中庭は、これら模擬店や各企画の舞台・観客席として、文化祭中賑わっている。尚、三年模擬店とフリ

ーマーケットの売り上げは、毎回、全額チャリティにしており、その送り先は前期執行委員会が検討する。今年度は、十月に起こった新潟県中越震災への義援金とした。

一方、育友会のご活躍も素晴らしく、毎年、複数の企画で参加して頂いている。恒例の「ギャラリー親心亭」には、保護者の方々の数々の力作が展覧され、その多才さに感動する。

二日目の土曜日は、休日とあって、来客も多い。本校生のご家族や友人はもちろん、今年度、執行委員会が、一般中学校や附属中学校に学校祭ポスターとパンフレットの抜き刷りを郵送で案内したためか、中学生の姿も多く、附属高校の文化祭を少し体験していただけたかと思う。

最終日には、黄昏祭（後夜祭のようなもの）があり、いよいよ文化祭もクライマックスをむかえる。キャンプファイヤーを囲みながらフォークダンスを踊り、最後に花火を打ち上げて、半年間掛けて準備した二日間の文化祭を思いっきり満喫して、幕を閉じるのである。

このように多くの生徒が知恵を出し合って成し遂げる文化祭ではあるが、問題点はいくつかある。より質の高い内容を目指し、生徒ひとり一人の成長に資するようなものに進化するよう絶えず目を配り、指導していくことがわれわれ教職員の仕事である。



高等部バザーへ向けて

附属養護学校
副校長

小竹 健一



本校高等部では1月30日（日）に「バザー」を行います。今回で20回目を迎え、地域の方々からも恒例の行事として楽しみにしていただけるようになりました。現在、高等部はその「バザー」を目指して作業学習に取り組んでいます。

作業学習は養護学校特有の学習形態で、本校では中学部と高等部に設定しています。作業活動を学習活動の中心に据えた総合的な学習です。将来の職業的・社会的自立を目指し、働く意欲を培い、生活する力を高めることを意図しています。具体的には、「木材加工」「窯業」「食品加工」などの屋内作業と「椎茸」や「水稻栽培」、「木炭づくり」などの屋外作業の2コースがあります。今回のバザーは屋内作業製品の一般向け販売が中心で年間の作業学習の総仕上げにあたります。3学期始業式の翌日からバザーまでのすべての曜日、朝の1校時から午後の6

校時まで、一日すべてを作業学習に当てます。高等部の学校生活全体が作業学習一色となります。またバザー前には泊り込みでの残業なども経験します。（手前味噌ですが）生徒たちのひたむきな頑張りの姿は「さすが、高校生」です。毎年、毎年、そのような生徒たちの頑張りの積み重ねで、製品の完成度も高くなってきました。それと同時に新製品の開発の方も進み、近年のバザーへの来校者は飛躍的に増えてきました。多くは地域の一般の方ですが、本校製品を使用されている得意先も来校されこともあり、大量の注文が舞い込むこともあります。さて、今年のバザー製品の出来具合はいかがなことになりますか。

高等部3年生にとっては学校生活最後の大きなイベントです。良い思い出となってくれたらと願っています。



非常勤講師から

数学教育研究からみた 脳科学の形象

数学科
非常勤講師

黒田 恭史

最近、巷では計算問題を繰り返せば脳が活性化し、挙げ句は文章問題まで解けるようになるといった「トンデモ科学」が流行である。しかし、毎日の計算ドリルの宿題を真面目にやっても、算数の授業での文章問題が一向に解けなかったという経験を持つ大人達は少なくない。ヒトの脳はつくづく摩訶不思議な代物だと思う。

近年、脳内の変化を測定する装置が次々と開発され、少しずつではあるが脳の仕組みが解明されるようになってきた。中でも近赤外線を用いた光計測装置は、学習過程における脳内のヘモグロビン濃度変化をリアルタイムに計測可能なものとして、教育研究への応用が期待されている。こうした脳科学の教育への応用の気運が高まる中、これまで教育学研究

で培われてきた叡智を結集し、その文脈から脳科学を捉えなおしてみることが重要である。筆者は、この間、数学教育学の立場から実験を行ってきたが、「わかる」ということは、脳が活性化するよりも沈静化すること、また活性領域の縮小化へと移行すること等が判明してきた。このことは、スキーの初心者が全身に極度の力を入れ続けてしまうのに対して、上級者になると全身のリラックスと局所的な力の投入が行えるようになるのと似ている。

将来、様々な形で教育に携わるであろう学生が、「脳科学」という言葉の呪文に惑わされることなく、子どもの実際から「脳科学」を捉えようとしてくれるならば、筆者の講義の目的は達せられたのではないかと考えている。

みちのくひとり旅

産業技術科学科
非常勤講師

宮崎 眞

高校の筧大城先生に、東北地方^{みちのく}を陸奥^{みちのく}というのは蝦夷地への道の入り口で「道の口」と習った。

私は高校卒業時にあまり考えることもなく機械工学の道の口に立ち、そして歩を進め今日に至った。

さて、教師をめざして今その道の口に立つ君は順調にすすんでいますか。自分の道の口が見つからないままとりあえず入学した君は見つかりそうですか。

私の担当している「創造技術実習」は、ものづくりがテーマです。自分の手を下して実際にものを作る過程において、大学で学んだ専門知識と自分の20年余りのキャリアを振りかえりそれをフル活用する。ものをつくるという観点で自分の日々の行為を顧みると、知識不足から学問をする必要性、学問

の面白さ、未知の学問との出会い、その中から自分のすすむべき道が見えることがあるのではないかと考える。講義室で、教科書や準備された資料を中心に受身的な学習とは異なるものを感じることができるとは思わないかと思う。

人はひとりでは生きられないが、所詮ひとり旅。

学生であっても気構えがパラサイトやニートであっては道の口を見つけることはチョー難しいと思う。世界的に不況で将来に希望を持ちにくいように思うかもしれないが、イラクと違い日本には諸君の進む道の口が無数にあることは間違いない。諸君はこの大学でいくつの道の口に会おうだろうか。私はものづくりの道の口の前に立ち諸君を待っている、「みちのくひとり旅」を口ずさみながら。

大学を去るにあたって

学長

村田 隆紀



昭和41年7月、京都学芸大学が京都教育大学に名前を変えたその年に、私は大学院の博士課程を中退してこの大学にやってきました。

それから38年余、他の仕事を経験することもなく、この大学で過ごさせて頂きました。何が思い出か、と聞かれても、あまりにもたくさんの出来事があったので、毎日を必死に過ごして来たので、選び出すことはとても難しく思います。それでも、何も知らない若造であった私を、一人前の物理の教師として育てていただいたことや、ささやかながら放射光を使った実験物理学の研究に従事できたことは、感謝するばかりです。

最後の4年間は、最も不慣れな仕事である学長と

いう職を、どのように果たせばいいのかを、毎日考えながら過ごしてきました。「遠山プラン」からはじまり、再編統合の交渉に時間を使い、法人化に到ったこの4年間は、それまでの34年間に私が経験したことすべてよりも、はるかに大きな出来事の連続でした。このような激動の時期に、健康を害することもなく、何とか無事に勤めることができ、心から安堵しています。

そして何よりも感謝すべきことは、在職中にご厚誼を賜った先輩、同僚、後輩の先生方、事務職員の方々、附属学校の先生方、そして私の前を通り過ぎていった若い学生諸君とのふれあいです。私は何という幸せ者なのだろうか、とつくづく感じています。

ありがとうございました。



退職にあたって

理事・副学長 小寺 正一



たいへん長い間勤めさせていただいた京都教育大学ですが、思うところがあり、今年度末（17年3月末）で退職させていただくことにいたしました。

六十歳のこの年まで三十一年間在職したことになります。この間、いろいろな経験をさせてもらいました。その点では感謝してお

ります。

いま、この長い期間を振り返ると、とくに、附属養護学校の校長職、図書館長職、副学長職と連続した最後の十年間は、得ることも多くありましたが、たいへん忙しい年月であった、という思いでいます。

在職中にご厚誼を戴いた方々に、衷心より感謝いたします。有り難うございました。

退職にあたっての感謝のことば

理学科教授 前川 紘一郎



私が赴任することになった35年前には、大学構内には今のような木々の緑はなく、地面の赤茶けた色が建物の前一面に、また至るところに見えていたことを思い出します。初めて勤務することにな

った所が深草という地名がふさわしい土地であろうとは、まだ思ってもいなかった時でした。今退職のときが近づくにつれ目にする緑の深さは、いつも心を和ませてくれる存在です。現在も、同じように静かなたたずまいの大学にたどり着くとほっとする面があります。緑豊かな職場に長年にわたって勤務、多くの学生諸君とも親しく過ごせたことは幸いで、幸運であったというほかありません。

記憶に新しいところでは、教育実習の際には、本学附属校での実習生の真剣な実習態度に接したり、指導教員との交流に学べたこと。夏休みの時期、学外から参加した小・中学生が野外活動やイベント活動に取り組んでいる、その子どもたちの眼の輝きや

学生たちの活動ぶり、子どもたちへの大学教員のはつらつとした指導の様子など。また国際交流としてタイ国教育大の事情や文化に実際にふれ、相互の教員間の交流に参加でき、見聞や体験に学んだことは得がたいことでした。

個人的な希望としては、伝統ある小さな大学という特徴を生かした体制のもと、入学当初の学生たちの意気込みが他方にそれず、卒業後の生き方へとつながってほしいと考え、例えば基礎セミナーなどの充実を願っております。

35年間、学長村田先生をはじめ、身近でご迷惑をおかけした地学教室や理学科の教員の方々、大変お世話になりました。その中で安原通博先生が平成元年にお亡くなりになったことは真に残念に思います。更には委員会や諸行事を通じて知合った教職員のみなさん、私の拙い事務の内容を補っていただいた職員のみなさん、多々ご面倒をおかけしたことと申します。厚く御礼申しあげます。

京都教育大学の発展を祈念しつつ・・・、ありがとうございました。

ありがとうございました

理学科教授 伊吹 紀男



私が、総合科学課程の物質科学担当として、京都大学化学研究所から本学に着任したのは1991年1月1日でした。本学の第一印象は「こんな近くに、こんなにきれいな大学があったのか」でした。

当時は総合科学課程の第一期生が卒論を始める直前で、学生は大変積極的であり、早く卒論に取り組みたいという満々の意欲に圧されていました。逆に、私は移管した実験装置の立上げに梃子摺る毎日でした。そのような時も正門のクスノキの木は、それを見るだけで安堵感を与えてくれました。当時は、特修理学もあり学問性は現在より高度であったことは確かです。その後の「改組」から「法人」に至る過程で、学問の発展に疑問が投げかけられていますが、解はまだありません。本学は小さい規模の中に総合大学の要素を強くもっています。この特長に対して「ミニ〇〇学部ではダメ」という否定的批判を耳にします。私は、「教育は否定あるいは排除の論

理ではなく、許容と合意が基本」という信念もっていますので、何となく違和感を抱いたままです。ミニ学部の特徴を整理して積極的に活かせば、たとえば、新しい物質観を美術的センスで描いたり、制作したりする感性をもった物理や化学の学生が育ち、別の展開が拓けるのではないかと期待感を着任時から持っています。この理由の一つに、自分を磨くためには、対極にあるものと日常的なことから科学的に理解することが重要であるという確信があります。講義もこれを基軸にしてみましたし、学生も理解してくれたと思っています。

本学に在籍することにより、放射光化学という新しい分野を思う存分に展開できる環境を与えて頂き、卒論生とともに楽しみながら研究しました。お陰さまで毎年国際学会に参加する機会も得て、自分自身を成長させることも出来る大学であったと感謝しております。最後に皆様のご健康と法人化2年目に入ります本学がさらに発展することを祈っております。

光陰矢の如し

音楽科教授 西 勇夫



昭和48年4月に赴任以来、早くも30年以上が経過し、かつての紅顔の美少年(?)も髪や髭に白いものが混じるようになってきました。赴任して驚いたことのひとつに、当時の音楽科の学生たちの弾

いていた曲で、卒業試験は名曲のオンパレード。東京芸大のピアノ科の学生が考え込むような難曲がいくつも並んでいて、聴いてまたビックリしました。ここはすぞいところだ、そう思いました。チャレンジ精神に溢れていたともいえます。

まもなく導入された共通一次試験以後、このチャ

レンジ精神が良くも悪くも薄れたきたように思います。

それはともかく、私自身は自由に勉強できる条件を与えられ、また当時の個性豊かな先生方に親しく話を聞かせていただき、大変幸せな時期を持つことができました。最近の10数年は、いわば恩返しのつもりで多少つらい仕事もさせていただきましたが、大変貴重な得がたい勉強の機会をいただき、本当にありがとうございました。母親の介護のために定年の前に去らせていただきますが、大学・七附属ともに心豊かな学園として新しい歴史を歩まれることをお祈りしています。

23年間ありがとう ございました

音楽科教授 小林 幸男



京教での生活は、赴任一年後の春に思いもよらぬ病に罹り、闘病に明け暮れた23年間でもありました。定年を7年残してはいますが、私としては当初の予想を大きく越え生き続けていますし、ましてここまで働き続けられるとは思ってもみなかったこと！大いなる幸せを感じています。幾度か入院もし、学生に卒論原稿を病棟まで見せに来させるような迷惑もかけましたが、幸い授業期間外の手術が多く、病気による在任中の休講をトータル一ヶ月余に収めることができたのは、我ながら「なかなか」と思っています。

ここまで何とか来られたのが学内の皆さんのお陰

であるのは、言うまでもありません。仕事量への配慮や荷物運びの介助など、いろいろ気配り下さって本当に有難うございました。また、特に私の研究室のまわりの音楽・幼教の先生方、毎日のようにふらりと研究室に邪魔しては無駄話を続け、お茶やお菓子を食い逃げしていく私の我が儘によく長年耐えて下さり、感謝に堪えません。その一方、13年余に亘る週10数時間の治療の所為で、D棟以外の方々と接する機会が少なかったことや、委員会などでほとんど活動できなかったことは、非常に心残りでした。

これからの人生は、まずは少しゆっくりのんびりし、たまりっぱなしの研究資料の整理や補助調査をぼちぼち始め、併せて、主夫業にも励む所存です。皆様もお元気で。

命の甘美な学園に感謝

美術科教授 脇坂 淳



先日、卒業生のひとりが訪ねてきて申します。「随分ひっそりとして寂しくなりましたね。私の在学中は“濃い人”がたくさんいました。“濃い人”は学生のことで、1997年の特別教科の解体、特美の消滅は学生の気質を大きく変え、そして2000年からの学生定員の削減こそキャンパスに寂寥感を漂わせはじめました。

私が大学にまいりましたのは1993年4月です。数年の間は“濃い人”たちと、飲むほどに酔うほどに好きな美術や人生を語り合い、もっとも充実して楽しかった時期に当たります。

美術館勤めの長かった私にとりまして、大いなる

戸惑いは1997年9月に命じられた附属桃山小学校長です。すべての附属に3歳児から養護学校を含めて小・中・高生がおよそ2700名も在籍しているのを知り、日に日に新たな命の世界が私の中に広がっていくのを覚えました。もはや戸惑いは一変して喜びになり、命の甘美なところここにあり、と感じたのを思い出します。

ゆとり教育が謳われて未だそれほど時日を経ないのに、それが原因で学力低下をきたしたから授業時間増を、と最近の文科相。小刻みの改変がお好きです。改まったかどうか甚だ疑問ではありますが、改革揺れの続く大学、それでも幼児から大学院生、加えて年輩の社会人が集まり散じる命の甘美な学園、是非とも生き活きとした気が露わになるのを願っております。12年間お世話になりました。

緑あふれる大学での思い出

家政科助手 藤井まり子



1975年9月に赴任以来、29年7ヶ月、学生時代の4年間とあわせると約34年間を藤森学舎で過しました。大学卒業後3年5ヶ月の公立高校勤務を経て戻ってきた母校は建築ラッシュが終わり、現在の校舎がほぼそろっていました。校舎の周りに植えた幼木が今では立派に成長し、B棟の周囲では樹間が狭く感じられるようになりました。緑あふれる環境で勤められたことに感謝しています。

勤め初めの若い頃には体力増進といえは聞こえがいいですが、昼休みや土・日曜日に学科を越えたメンバーでテニスをしていました。体育の宮田先生を

中心にいつの間にかグループができ、他大学の教職員と交流試合をしたこともあり。また、同様に正月明けに信州までスキーに行くのを恒例にしているグループがあり、それにも何度か参加させていただきました。上級者を講師にミニスキースクールといった場面もあり、往復の旅程や宿では家族的な雰囲気の中、教育談義に花を咲かせていました。今となっては懐かしい思い出です。

あっという間の30年でしたが、その間お世話になった教職員の皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

今後の皆様のご活躍と京都教育大学のさらなる発展をお祈りしております。

ありがとうございました

英文学科教授 鈴木 壽一



1998年4月着任以来7年間、お世話になりました。

最初の2年間は専門科目の授業で苦勞しました。一般英語と違って、専門科目は知識はあっても授業となると、何をどんな順序でどのように提示すべきか、講義とディスカッションの割合など、試行錯誤の連続でした。当時は改組の最中で、私も複数の委員会やワーキング・グループのメンバーに選ばれて1日に複数の会議があることも多く、土日は翌週の専門科目の準備に費やし、余裕のない毎日でした。

3年目は斎藤栄二先生が退官され、10名以上の英語教育で卒論や修論を書く学部生と大学院生を一人で指導しなければならず、また現職の先生の修論

指導は夜の授業が終わってからで大変でしたが、非常に充実した教員生活でした。4年目以降は、教育委員会の研修会や文科省研究指定校の指導委員、中英研や高英研、学校単位の研修会などの仕事が増え、今年度は50回を超えました。その分、学科会議ほかの会議に欠席が多くなり、皆様にはご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

今、振り返りますと、ご迷惑をおかけしたり、お世話になるばかりで、私が京都教育大学の発展充実に貢献できたことがあまりにも少ないことを申し訳なく思っております。4月からの京都外国語大学での教員養成と再教育の仕事を充実させることが皆様への恩返しと考えて、がんばりたいと思います。

最後になりましたが、京都教育大学の発展と、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。7年間、ほんとうにありがとうございました。

定年退職にあたり

教務課
教務課長補佐 上田 正人



振り返れば短く、思い起こせばやっぱり永い39年間でした。

採用されたのが昭和41年2月、まだ京都学芸大学の頃でした。戦後も20年が過ぎ、高度成長期に入り始めていた時期とはいえ、キャンパス内の建物は旧軍隊の木造建築ばかりで、学生食堂（現在の演奏室が位置するあたり？）に隣接したトイレに至っては、進駐軍（アメリカ占領軍）が使用していた当時のままで便器の位置が異様に高く、小用を足すたびに思いっきり背伸びをさねばならぬ不便なものでした。その後、建物は次々と新しくなり、旧軍隊時代の建物といえば、今では博物館的に職員会館が残るのみになっています。そんな建物の中であって、唯一、新しくきれいな鉄筋コンクリート造りであったのが附属図書館で、私の最初の勤務場所でありました。九州

の片田舎から大阪に出て来てからの転職ですので、大学への勤務は、緑の講内環境を含めて夢のような職場でした。附属図書館の7年間で皮切りに、附属高等学校で9年間、京都地区附属学校で4年間、20年後にして初めて大学本部勤務となり現在に至りました。本を読むことを教えてもらった附属図書館、勝負は別として甲子園予選に臨む附属高校野球部員のひたむきさ（当時コーチを務めました）、附属中学校の臨海学校における遠泳上陸時の一般海水浴客から起こった拍手の嵐、大学の一大行事・水泳訓練における助教の活躍と教職員の団結力、数えあげればきりがありませんが、それぞれの場でそれぞれに大きな感動をいただきました。

39年間の永きにわたりお世話になり本当にありがとうございました。

京都教育大学は永遠に不滅です（でも今年から巨人ファンは止めようと思っています）。

皆様の健康とご活躍を祈念いたします。

教員養成へ夢を託して

附属高等学校
数学科教諭 小宅 邦夫

私が本学を卒業し、教職について37年目を迎えている。高校生の気質も戦後の復興とともに大きく変化してきたように思う。社会が貧しくても'70年までの高校生は正義感に基づいて物事を判断し言動に結び付けていたように思う。万国博覧会を経て経済発展期の'70年代に入ると損得の判断により言動し、飽食の時代を迎えた'80年代には三無主義が台頭し、その場のフィーリングによって言動するように変化していった。'90年代には、経済の成熟期に至り社会的怠惰が生じバブルがはじけた。'00年代を迎えニートと呼ばれる若者が100万人とも言われる最近、高校生の社会性が薄まり何事も自己中心に判断し言動している。経済を最優先させてきた結果、社会が大きく変化していった。経済的にも二

極化が進むなか、若者たちは将来に夢を託せない状況にある。国際化、情報化が加速化され、凶悪犯罪や情報お宅が増えている。若者にとって、情熱と努力で自己実現がかなうような社会が切に望まれる。'98年に海外教育事情視察に文科省から派遣されたが、諸外国では教育改革を進めるなかでも青少年への保護者の権威と責任が見失われることはない。日本の教育にとっては、学校の権威と信頼を蘇らせ日本人としての誇りをもった国際人を育くむことが肝要である。子どもたちには、語学力をはじめ自信を持って世に羽ばたける確かな学力と豊かな情操力が欠かせない。そのための、教員養成に課せられた期待と責任は重い。

卒業生の声

美術をより身近なものに…

教科教育専攻美術教育専修
2004年卒業生 松村 一樹

京都教育大学では、学部を卒業してから約20年を経て大学院でもう一度学ぶ機会を得ることができました。今振り返ってみるとこの2度目の大学での期間は自分にとって大変貴重な時間であったと思います。それまでの自分の教育実践を振り返るよい機



会になりましたし、学校現場だけでは見落としてしまいがちな視点などより多くのことを学ぶことができました。また、自分のこれからの教育実践のテーマについても深く考える機会を得ました。

現在は小学校の現場で鑑賞教育の実践と研究に取り組んでいます。この間、京都国立近代美術館での「美術館鑑賞教室」では、のべ300名以上の子どもたちとのギャラリートークを行いました。また、親子で鑑賞を楽しむことを目的にした「親子美術館鑑賞教室」などを行っています。今後も学校と美術館との連携、生涯学習の視点を見通しながら、子どもたちにとって美術作品や美術館がより身近なものになるような取り組みをすすめていきたいと思っています。

やっぱり先生、やめられへん！

平成15年度現職教員長期派遣
研修生 木内知江子

私は、小学校教師をしてもう20数年になる。いつも元気で明るく、そして楽しいことが大好きな先生と言われてきた。学年主任や研究主任などのお役もいただいていたが、もっと道德教育の研究がしたいと常々思っていた。そんな時、思いがけなく、京都府や亀岡市の教育委員会から選んでくださり、1年間の研修の機会を受けることとなった。

教育の専門機関として名を馳せる京都教育大学に1年間みっちり研修を受けることができ、おかげで私は、本当に多くの人との出会いや学び、そして自分自身の教師としてのレベル向上をさせていただいたと感謝している。

私が研究テーマとして挙げたのは、『豊かな心を培う道德教育の研究と、道徳的実践力を向上させる効果的な指導方法の研究』である。子どもたちの心を豊かに育てる道德教育を目指したい、心のオアシスとなる授業を目指し、心と学力面の向上を図りたい・・・と考えていた。多くの授業や研究会に参加させてもらい、学べたことは、大変勉強になった。また、年若い友人ができたことも収穫であった。現

場教師のリアルな体験談を聞くのも結構参考になったようである。今後も私でできることなら、大学教育と実際の現場をつなぐ架け橋のような仕事にも関わっていきたく思っている。

研修後、昨年12月本を出版することになりました。笑いと涙と感動がてんこ盛りの『やっぱり先生、やめられへん！』文芸社です。是非読んでくださいませ。

今年も大学院の授業を週1回よせてもらって、大変な中にも学ぶことの楽しさをひしひしと感じている私です。「ありがとう」



原稿募集！

皆さんからのご意見や投稿を広く募集いたします。とりわけ地域の皆さんや学生の皆さんからの投稿や企画等歓迎します。建設的なものであれば、紙面の許す限り掲載したいと思っておりますので、どんどん送って下さい。原稿等には締切期限を設けておりません。ただし、採用の可否は委員会で判断いたします。

【投稿要領】

- 身近なできごと、ちょっとした発見、楽しかったこと等、テーマは自由です。
(テーマ例：研究室紹介・旅行記・趣味・体験談・提言等)
- 写真・イラストも募集します。タイトルまたは説明文を付けて下さい。
- 送付先
タイトル、氏名、連絡先を明記の上、下記へお送り下さい。電子メールでも構いません。
〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学総務課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail : kouhou@kyokyo-uac.jp

第 115 号の読者の皆さまへ

kyokyoをお読みいただきありがとうございました。
読まれた記事のご感想や広報誌のあり方などのご意見を、お聞かせ下さいませんか？
あなたのご意見を、今後の企画・編集の参考にさせていただきたいと思っておりますので、上記の連絡先にお寄せ下さい。

115 号編集後記

広報の115号をお届けいたします。卒業式にあわせての発行となります。卒業生の皆さんのご活躍を祈念しています。また、例年のように、年度末で退職、転出の先生方にもご挨拶を寄稿いただきました。有り難うございました。

さて、本学では、昨年10月に京都駅前のキャンパスプラザに「サテライト教室」を開設しました。また、学生の主体的な研究活動を支援するための「e-プロジェクト」という取り組みも充実してきました。この二つを特集として取り上げました。地域に貢献するための体制と学生の学修支援体制のそれぞれの一例を見ていただけたと思います。

表紙には附属学校のご協力を戴いていますが、今回は附属高等学校の坂上 碧さんの作品をお借りしました。有り難うございます。

その他、記事を寄稿いただいた方々に御礼を申し上げ、私の最後の編集後記といたします。

地域連携・広報委員会委員長 小寺 正一



京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	小寺 正一 (理事・副学長)	
副委員長	谷口 淳一 (美術科)	
委員	西 勇夫 (附属学校部長、音楽科)	浅井 和行 (附属教育実践総合センター)
	田中 里志 (理学科)	石川 誠 (社会科学科)
	安江 勉 (美術科)	荒木 光 (附属環境教育実践センター)
事務担当	総務課	



京都教育大学広報 第115号

発行日
2005年3月25日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>